

遠隔ディスカッションにおける「やりづらさ」と経験の関係

The Relation between Sense of Difficulty and Experience in Online Discussion

中野 美香

Mika NAKANO

福岡工業大学

Fukuoka Institute of Technology

<あらまし> 近年、教育現場において遠隔ディスカッションの導入が増えている。しかしながら、オンライン状況では情報が限られる環境で対人関係の調整や意見の発表など複数の処理が同時に求められることから、「やりづらさ」を感じる学習者も少なくない。そこで、本研究では 15 回の講義で遠隔ディスカッションを経験した学習者を対象に「やりづらさ」と経験の関係を明らかにし、遠隔ディスカッションの支援方法を提案することを目的とした。

<キーワード> コミュニケーション, 遠隔教育・学習, 学習環境, 教育方法, 授業実践

1. はじめに

近年、オンラインで学習者同士がコミュニケーションする遠隔授業の導入が進んでいる。これに伴い、オンライン・ディスカッション可視化による授業方法の提案（水本・中村，2020）など教育 ICT 環境の実現に役立つ研究が精力的におこなわれるようになった。遠隔でのコミュニケーションは利点が多くある一方で、経験の少ない学習者にとっては対面との違いに戸惑いもある。誰もが十全に活動に参加するためには、小浜（2021）が指摘したコミュニケーションのユニバーサルデザインについて考える必要がある。

遠隔コミュニケーションに対する大学生の認識を調査した中野（2021a）では、視覚や身体を通して得られる情報が限られるため行動規範がわかりづらいことが「やりづらい」という感覚の原因になっていることが明らかとなった。ここで言う「やりづらさ」とは、「その状況を何となく避けたい感じ」のことを指す。中野（2021b）は遠隔ディスカッションの「やりづらさ」を解消するための事前・事後学習の構成を提案した。しかし、繰り返しによって「やりづらさ」は解決されるかどうかについては未検討であった。そこで本論は、遠隔ディスカッションの「やりづらさ」と経験の関係に着目し、遠隔ディスカッションの支援方法を提案することを目的とする。

2. 方法

遠隔ディスカッションの「やりづらさ」と経験

の関係进行分析するために、全 15 回遠隔で実施した 2021 年度の教養科目の受講者を対象とした。この講義では 60 分間の心理学に関する講義動画を視聴した後、毎回 30 分程度、遠隔ディスカッションの時間を設けた。遠隔ディスカッションでは教員からの説明後、Microsoft Teams のブレイクアウトルーム機能を用いて 5 名程度のグループをランダムに作り、与えられたテーマについて約 20 分間、ディスカッションをおこなった。その後に全体講義に戻り、10 分程度で各代表者に発表してもらい、教員とクラスサポーターの学生がコメントした。ビデオオンおよびマイクオンを推奨したが、困難な場合はビデオオフやチャットでの参加も可とした。前半の講義では 10 分程度、グループ・ディスカッションの技法に関する講義も含めた。

上記の講義の受講者を対象に Microsoft Forms を用いてオンラインで質問紙調査を実施した。第 15 回の講義で趣旨説明をおこない、講義後に協力者に匿名で回答してもらった。本論では完全な回答が得られた 154 名の回答を対象にした。

本論で分析した質問項目は、問 1「オンラインのディスカッションで、経験を積むにつれてやりづらさを感じなくなった内容はありますか」、問 2「オンラインのディスカッションで、経験を積んでもまだやりづらさを感じる内容はありますか」である。自由記述の回答をコーディングした。コーディングは 2 名でおこない、不一致がある場合は議論により解消した。

3. 結果と考察

3.1 経験を積むことで解消される「やりづらさ」

問1「経験を積むことでやりづらさを感じなくなった内容がありますか」の回答結果を以下に示す。やりづらさを感じなくなった内容があると回答した学生は99名(64.3)、経験を積んでも解消されていないと回答した学生は36名(23.4%)、元々やりづらさを感じていない学生は19名(12.3%)であった。この結果より、半数以上の学生が経験を重ねることで何らかのやりづらさを解消できていることがわかる。

このうち解消された上位三項目に注目すると、議論の進行に関する内容(25名, 16.2%)が最も多く、「進行がスムーズになった」「司会をやるうちに話しかけ方を工夫することができた」などの回答があった。次に多かったのは意見の主張(21名, 13.6%)で、「人の様子をみて意見を言おうかを考えていたが、自分から言えるようになった」「経験を積むにつれてすらすらと話せるようになった」などが挙げられた。三番目は相手の様子がよくわからない問題(19名, 12.3%)で、「話すタイミングは少しわかるようになってきた」「遠隔で顔が見えなかったので話しづらく感じる内容があったが回数をこなすことで慣れてきてからは感じなくなった」などがあった。議論の進行については講義で学習したこともあり、回が増えるにつれて理解が進み、問題が解決されやすかったものと考えられる。

3.2 経験を積んでも解消されない「やりづらさ」

問2「経験を積んでもまだ「やりづらさ」と感じる内容がありますか」の回答結果を以下に示す。やりづらさを感じることが「ある」と回答した学生は77名(50.0%)、「ない」と回答した学生は77名(50.0%)であった。これより、経験を重ねてもすべてのやりづらさが解消されたとは言えない学生が半数いることがわかる。

やりづらさを感じることがまだ「ある」と回答した学生が挙げた内容は以下のとおりである。最も多かったのは意見を伝える際のやりづらさ(18, 11.9%)で、「感じにくくなったとはいえ相手の気持ちが把握しづらさ」などオンライン状況が緊張感を高め、適切なタイミングを掴みにくいなどの回答があった。また相手の様子がわからない問題については、「やっぱり無反応が一番困る」な

どビデオとマイクがオンではない相手がいる状況でのやりづらさも同様に多くの回答があった(17, 11.3%)。また機材や回線などのトラブルに関して、「チャットだと少し時間がかかる」「ネットワークの不具合には慣れない」など環境やスキルに関する回答があった(16, 10.6%)。

3.3 「やりづらさ」を低減するための支援

上記の結果より、慣れによって解決される内容もあるが、経験を重ねても遠隔ディスカッションに対してやりづらさを感じる学生がいることがわかった。以上の知見から「やりづらさ」は①発言方法など自分自身で解消できる項目と、②他者との関係で解消できる項目と、③回線トラブルなど自分では解消できない項目に分けられる。速やかに問題解決ができるように対象別にマニュアルを作成し、最適な行動や考え方について講義で共有することが支援につながると考える。また、あらかじめ学習者の経験回数ややりづらさの感じ方について把握することも授業運営に役立つであろう。

4. おわりに

本研究では15回の講義で遠隔ディスカッションを経験した学習者を対象に「やりづらさ」と経験の関係に注目し、遠隔ディスカッションの支援方法を提案することを目的とした。今後は具体的なマニュアルを作成し、公開したい。

引用文献

- 小浜朋子(2021)コロナ禍における「コミュニケーションのユニバーサルデザイン」に関する考察: SUACの学生レポートの分析から. 静岡文化芸術大学研究紀要, 21, pp.77-80
- 中野美香(2021a) Teamsを用いたグループワークの教育的価値: コミュニケーションの心理学における導入事例. 福岡工業大学 FD Annual Report, 10, pp.22-27
- 中野美香(2021b) 遠隔ディスカッションにおける「やりづらさ」の解消を目的とした事前・事後学習の構成. 第28回大学教育研究フォーラム大会講演論文集, p.166
- 水本武志, 中村祐希(2021) オンライングループディスカッションの可視化技術と実践モデル. 日本教育工学会 2021 春季全国大会講演論文集, pp.501-502